



最強Fランク冒険者の 気ままな辺境生活？ 1

ALPHAPOLETS

紅月シン
Shin Kouduki

アルファライト文庫 

グレン

『紅蓮の獅子』という
パーティーを率いる
Aランク冒険者。

アリーヌ

冒険者ギルドの
受付職員。
いつもロイを
担当している。

フルール

『紅蓮の獅子』の一員。
自称「下っ端」だが
れっきとしたAランク冒険者。

アニエス

『紅蓮の獅子』の一員。
冒険者にして
Aランクの魔導士。

セリア

ルーメンの街にある
小さな宿屋の娘。

ロイ

Fランクの新人冒険者。
規格外の実力を持っているのに
まるで無自覚な困り者。

第一章 辺境の街とFランクの冒険者

辺境の街ルーメン。

魔王が倒され、各地で活気が取り戻されていく中、現在世界で最も活気に満ちていると言われるその街は、今日も賑やかすぎるほどの喧騒に包まれていた。

街角は人と物で溢れ、ここで稼がなけりやどこで稼ぐとばかりに商人達の怒号が飛び交う。

その勢いは街のあちこちにまで波及し、大きなうねりとなってルーメン全体を覆っていた。

誰も彼もが忙しなく動き回っている。

それはここ『冒険者ギルド・ルーメン支部』にいる者達も例外ではなかった。

人と物の流れが激しいとなれば、必然的に冒険者の需要も増えるというもので、むしろ外以上に忙しく騒がしいのが、この常である。

だがその瞬間、ギルド内の喧騒を上回る声がその場に響き渡った。

「そこを何とかありませんか……!?」
 一体何かと、ギルドにいた者達の視線が、五つある受付カウンターの一つに集中する。そこにいたのは十五歳前後と見られる少女。

桃色の髪に同色の瞳、顔立ちは整っていて、質素ではあるが清潔感のある服装をまとっている。

明らかに冒険者ギルドにいるには相応しくない姿だが……その理由はすぐに判明した。

「お願いします！ 薬が作れないと、母が……！」

どうやら彼女は依頼者であつたらしい。

何人かが新しい依頼かと興味を示して口を閉ざしたせいか、受付で対応している女性の声はつきりと響く。

「……こちらとしても出来れば受け付けたいのですが、さすがに無理です。確かに依頼料というものは、冒険者の方々が納得するのであればいくらであつても問題はありません。しかし……『アモールの花』を金貨一枚で、などという依頼を出してしまつたら、私達の信用にも関わりますから」

聞こえてきた言葉に、大半の者達が興味をなくし、自分達の会話に戻つた。

受付の女性の言っていることは正しく、常識的な対応だつたからだ。

金貨一枚とは、決して安い金額ではない。一般家庭であれば三カ月は裕福に暮らせる大

金であるし、内容次第では一流を意味するCランクの冒険者あたりでも受ける報酬額だ。あくまで、金額相応な依頼内容ならばの話であるが。

アモールの花は、とある秘薬の原料となることで有名な、非常に希少な代物だ。その秘薬の効果は凄まじく、大半の病を癒す万能薬とされ、取引額は金貨百枚以上とも言われている。

そんな花を金貨一枚で採ってくるなど、到底無理な話だ。少なくともギルドとしては、こんな依頼を受け付けることは出来まい。

「っ……どうしても、無理なんですよか……？」

「……少なくとも、ギルドとして仲介することは出来ません。冒険者の方が直接請け負うのでしたら、問題はありませぬけれど……」

「っ……!?」

少女は期待に絶る顔で振り向いた。

「……しかし、成り行きを見守っていた数少ない者達も、その必死な視線から逃れるように顔を逸らす。どう考えても、割に合わない依頼だ。」

「あっ……」

状況を理解したのか、少女は唇を噛み締め、受付の女性へと頭を下げた。

「……分かりました。ご迷惑をおかけして、すみませんでした……」

「……いえ。こちらこそお力になれず申し訳ありません」

やるせない光景を見た何人かが、憐憫と共に溜息を吐き出した。

あの少女の依頼を誰も受けなかったことに対してではない。彼女がこれから辿る運命を想像したからだ。

少女の目に、諦めはなかった。彼女はおそらくこの後、自分一人でアモールの花を探りに行くのだろう。

……あれは、そういう目だ。

アモールの花を探るのが可能か否かで言えば、不可能ではない。

実際、ルーメンの近くには、アモールの花が咲いている場所がある。

だがそれは、容易に採れるということの意味しない。もしもそうならば、誰かがとつくに採りに行っているはずだ。

あの少女も、そんな状況を理解しているからこそ、冒険者に依頼を出そうとしたのだろう。

とはいえ、今の彼女に忠告したところで意味はあるまい。

それでも諦められないだけの理由があるのは、先ほどの叫び声と、何よりもその目を見れば分かる。

冒険者とは慈善活動ではないのだ。責任を取れない以上は手を差し伸べるべきではない。

だから、誰もが黙って彼女を見送るしかなかった。

と、その時であった。ギルドの入り口の方から、どことなく気楽そうな少年の声が響いたのだ。

「あのー。誰も受けないでしたら、僕が受けてもいいですか？」

「……え？」

少女を含め、状況を見守っていた全員視線が、声の方向へと向けられた。

いつの間にか、ギルドの入り口に一人の少年が立っていた。

黒い髪に、黒い瞳。年齢は少女と同じか、少し上くらいに見える。

その珍しい髪の色合いに、あるいは単に先ほどの言葉に驚いたのか、少女は呆然としたまま少年に見入る。

返事をしない少女の代わりとはかりに、受付の女性が少年へと声をかけた。

「……ロイさん、いらしてたんですね」

「ええ、ちょうど来たところです。ただ、話は大体聞いてました。要するに、採取依頼ですよね？ それなら僕でも受けることは出来ると思うんですけど……」

ロイと呼ばれた少年に受付の女性が何か応えようとしたが、それよりも先に件の少女が口を開いた。

「ほ、本当ですか!? 本当はわたしの依頼を受けてくれるんですか!？」

「僕でなければ、ですけどね。実はFランクなので、絶対に依頼を達成出来るとは言えないんですが……」

Fランクとは、要するに冒険者になったばかりの新人だ。実績は皆無で、実力も保証されない。普通ならば積極的に依頼を出したいとは思わない相手である。

少女もそのくらいのは知っているはずだが、関係ないとばかりに首を横に振る。

「いえ……誰にも受けていただけないと思っていたところでしたから、そう言っただけで嬉しいですよ！」

「うーん、そこまで喜ばれちゃうと、今度はプレッシャー感じちゃうだけだなあ……」

本当に嬉しそうな少女の表情を見て、ロイも満更ではなさそうだった。

そんな二人のやり取りは、傍から見ている分には微笑ましいくらいだが……ここは己の腕一つで日々の糧を得る荒くれ者達が集う冒険者ギルドである。

そこにあるのは冷静な目でしかない。誰かがポツリと呟いた。

「……死体が一つ増えたか」

だがそんな声など聞こえていないらしく、少年はこの先に待ち受ける暗い未来のことなどまるで想像していないかのような呑気な顔で、受付の女性へと視線を向けた。

「で、僕受けちゃって大丈夫なんですよ？」



「……そもそもギルドは仲介を断りましたから、ロイさんがよろしいのでしたら、こちらとしては何の問題もないのですけれど——」

「——まあいいんじゃないか？ そいつにはちようどいいだろうよ」

どこか歯切れの悪い女性の言葉を遮って、新たにこの場に現れた男が口を挟んだ。意外な人物の登場に、ギルドの中に僅かなざわめきが広がり、周囲の注目が増す。彼に気付いた受付の女性が、僅かに眉をひそめる。

「……グレンさん」

彼女の口調に苦いものが混じっているのは、ある意味当然である。

燃え盛る炎のような赤い髪と瞳を持つその男は、おそらくこの街で最も有名な冒険者——グレン。

超一流の証でもある冒険者ランクAを所持し、時にこの街最強の冒険者などと言われる人物である。

そんな男が、少年のやろうとしていることを保証してしまったのだ。これではギルドとしてはもう口を出せない。

基本的に、ギルドと冒険者との関係はギルドの方が立場は上なのだが、それでも、グレンほどの者の言葉を蔑ろにするわけにはいかない。

受付の女性は少し恨みがましい目でグレンを一瞥し、それっきり口を閉ざした。

しかし、そんな事情を知ってか知らずか——おそらく知らないのだろうロイが、無邪気に口を開く。

「ありがとうございます！ 正直、受けて大丈夫かあまり自信はなかったんですが、グレンさんにそう言ってもらえるなら、大丈夫そうですね」

グレンはそんなロイを見つめ、口の端を吊り上げて笑う。

その目に怪しげな光を浮かべながら。

「はっ、そうだな。自分じゃどんな依頼が相応しいかも分からないひよっこに、オレがお墨付きを与えてやるよ」

その声から滲む感情にはまるで気付いていない様子で、少年は素直に笑みを浮かべる。

「はい、本当にありがたいです！」

つまらなそうに鼻を鳴らすグレンを横目に、ロイは少女に向きなおった。

「えっと、そういうわけで、僕が受けようと思うんですけど……本当に僕で大丈夫ですか？」

「はい、もちろんです！ ……と言いますか、こちらこそ、本当に受けていただいているのですか？ その、採取依頼は採取依頼でも、ただの採取依頼ではないのですが……」

「ああ、その辺は聞いていたので大丈夫です。ただ、理由までは聞いていなかったの、出来れば教えてほしいですが」

「あ、はい、分かりました。えっとですね——」

そんな二人のやり取りを聞くともなしに耳に入れながら、グレンはゆっくりと視線を移動させ、入り口のすぐ横にあるコルクボードに目を向けた。

そこにはたくさん依頼票が貼ってある。

それらはまだ誰も請け負っていないもので、種類も様々だ。

討伐、調査、配達、護衛……そして、採取。

グレンはその採取依頼の一つに目を留め、鼻を鳴らした。

「ふん……」

「なるほど……アモールの花は身内が摘むと効力が高まるから、同行する必要がある、と」

そんなグレンの様子には気付かないまま、少女の話を聞いたロイが確認するように咬いた。拒否されてしまうことを恐れてか、少女が僅かに顔を強張らせながら頷く。

「は、はい。母の病を治すにはそこまですなければ難しいとのこと……。あの、足手まといにしかならないのは分かっていますし、難しそうなら……」

「いえ、確かに僕は冒険者になったばかりですが、これでも魔物との戦いはそこそこ経験がありますから。多分大丈夫だと思います。絶対とは言えませんが……」

「いえ……受けていただけのだけで、本当にありがたいので……。あ、そういえば、自己

紹介がまだでしたね。わたしはセリアって言います」

「ああ、そういえばそうでしたね。僕はさつきも呼ばれていた通り、ロイって言います。えっと……じゃあ、よろしくってことでいいですか、セリアさん？」

「あ、セリアでいいですよ？ それと、わたしの方がお願いする立場なんですから、普通に喋ってらっしゃって大丈夫です」

「んー、むしろ、依頼主の方が立場は上な気がするんだけど……まあ、その方が僕としても気楽だからいいか。じゃあ、そういうことでよろしくね、セリア」

「はい。こちらこそよろしくお願います、ロイさん」

そうして、依頼人と冒険者という関係にしては悪くない雰囲気のまま、二人が歩き出すのを横目に、グレンは先ほど見ていた依頼書をもう一度眺め、再度鼻を鳴らした。

そこにはこう書かれている。

アモールの花の採取依頼——依頼料は金貨千枚。受注条件は、最低Aランクであること。ただし、Aランク冒険者六人のパーティーで挑むことが望ましい。

しかし、そんな記述にはまるで気付かず、ロイとセリアはギルドを後にしたのであった。



ルーメンの街を出て西に歩くこと、約三十分。
目の前に広がるのは、広大すぎる大森林だ。

今まで人類が探索出来た範囲は、ほんの一部でしかないと言われるその森は、貴重な植物の宝庫となっている。

薬草や秘薬、他にも様々な物の原材料となる素材の採取が可能であり、文字通り宝の山である。

にもかかわらず、ここが「魔の大森林」などという物騒な名で呼ばれるのは、金になるという以上に危険だからだ。一般人が間違えて足を踏み入れたら最後、二度と戻ってこれれないと言われるほど、その森は危険に満ち溢れている。

そんな話を、セリアも母から散々聞かされていたのだが……

もしかしたら、アレは半分以上脅しだったのかもしれない——彼女はそう思っただけを傾げた。

何しろ、森に入って十分以上経過しているというのに、危険な場面には一度も遭遇していないのだから。

正直なところ、彼女はFランクの冒険者とここに来るのがいかに無謀かは理解していたつもりだった。

死ぬかもしれないし、あるいはロイに酷いことをされるかもしれないと、覚悟もして

いた。
それが分かっているにしても、セリアには他の方法を選ぶ余裕はなかったのである。

だからこそ、最初は色々な意味でガチガチに緊張していたのだが……こうして何も起こる心配がないとなれば、そんな状態も長続きはしない。

それに、冒険者なんてやるのはならず者ばかりだと聞いていたのに、依頼を受けてくれたロイは、街にいそうな普通の少年にしか見えなかったというのもあった。

自然と緊張はほぐれ、少しずつ会話が増えていく。

そうして打ち解けて話せば、この少年の人となりを多少なりとも把握するには十分で、セリアがロイのことを信頼出来ると思うようになるのに、それほどの時間は必要とはしなかった。

もつとも……彼に縋らざるを得ないほど、セリアが精神的に追い詰められていただけなのかもしれないが、

ともあれ、そうして話をしていううちに、どうしてこんな依頼をすることになったのかという話題になり——

「そっか……それで、お母さんが病気に」

「……はい。もつと早い段階で療養していれば、他の方法でも何とかなったらしいのですが……。母はわたしにも気付かせないように無理していたせいで、余計に悪化してしまっ

たらしく……」

「その結果、秘薬が必要になっちゃった、か」

「本当は、もっと早くにわたしが気付くべきだったんだと思います。母がそこまで頑張らなければならなかったのは、間違いないわたしのせいですから。……そんな風に言ったら、母は怒ると思いますけど。わたしのせいなんて、思ったことはない、って」

セリアは父親の顔を知らず、母親に育てられてきた。

女手一つで大変だったはずなのに、セリアの記憶にある母の顔は、いつだって笑みを浮かべていた。怒られた記憶なんてほとんどない。

どんな時でも自分よりもセリアのことを優先してくれた優しい母——彼女を助けるためなら、いかなる苦難も乗り越えられる。だからこそ、危険と言われているこの森に来たのだ。

そんな思いが伝わったのか、ロイはセリアに優しい目を向けた。

「……いいお母さんなんだね」

「はい！ 自慢の母です！ 尊敬も感謝も、いっぱいしています！ うちって、皆さんからの評判も良いんですよ！ ……そこまで繁盛してるってわけでは、ないんですが」

「確か、宿屋をやってるんだっけ？」

「はい。大通りからは外れたところにありますし、決して大きいとは言えない宿です

が……わたしの大好きな家です」

従業員も雇っていない、こぢんまりとした宿だ。セリアの母がほぼ一人で切り盛りしているせいもあって、大きな宿と比べれば、多分サービスも良くはないだろう。

セリアも出来るだけ手伝うようにしているもの、そこまで役に立てている自信はない。でも、母があつた宿を大切にしていることだけは知っている。

だから、母が元氣になったらまた一緒にあの宿で働くためにも、まずはアモールの花を探す必要があるのだが……

「——つと、ちよつと待った」

周囲を見回してそれらしい花を探していたセリアを、不意にロイが呼び止めた。

「はい……？」

いよいよ魔物でも出たのだろうかと思ひ、セリアは足を止め、僅かに身を強張らせる。……どうやら彼女の予想は当たっていたらしい。

その直後、五メートルを超す巨体が眼前に現れた。熊によく似た外見ではあるが、これほど巨大な熊はいない。全身を覆う血のように赤い体毛は、この森にやってきた者達の血を吸っているからだと言われても素直に信じそうなくらいだ。

その姿を見た瞬間、セリアは死を覚悟した。

母の言っていたことは脅しではなく、事実だったのだと気付き——

直後、魔物の頭部が消失した。

「……へ？」

「よ、っと」

セリアが思わず間抜けな声を漏らしたのと、気楽な声と共にロイの身体が魔物のすぐそばに着地したのは、ほぼ同時であった。

少し遅れて、思い出したかのように、魔物の首から血が噴き出す。

何が起こったのかをすぐには理解出来ず、セリアは呆然とその姿を見つめた。

そんな彼女を横目に、落ち着いた様子で死体の見分を始めるロイ。

「んー、出来れば魔物の死体はしっかり血抜きした後で持ち帰ってグレンさんには言われたけど……さすがにこの状況じゃあ、そんなことやってる暇はないかな？ まあ、ちゃんと大半の形は残したし、これで十分でしょ」

状況を考えれば、魔物を倒したのはこの少年ということになる。

だが……と、セリアは首を捻る。

「魔物」という名は伊達ではなく、最弱の魔物相手を追い払うだけでも一般人の大人では四、五人は必要だと聞く。

ロイがFランクならば、冒険者になったばかりなのだろうし……いや、そういえば、魔物との戦いはそこそこ経験があると言っていたか。

あれこれ思案を巡らせるセリアに、ロイが不思議そうな顔を向けた。

「どうかした？」

「あつ、いえ……何でもありません。少しだけ、驚いてしまっただけ」

「あ、もしかして、血に慣れてなかった？ ごめんね……気を遣えなくて」

そう言って頭を下げる少年の姿は、先ほどまでと何の変わりもない、気楽なものだ。

つまり……この程度は冒険者や兵士などにとっては朝飯前で、駆け出し冒険者の彼にとっても当たり前に出来ることなのかもしれない。

「えっと、血に慣れていないものもあります……魔物ってこんな簡単に倒せるものなんですかね？ 魔物というものは恐ろしくて、討伐するのは大変だと聞いていたのですが……」

基本的に、魔物は身体が大きいほどに強いと言われている。五メートルもあれば相当なはずだ。

「いや、単にこの魔物が弱かっただけだと思うよ？ 多少魔物と戦った経験があるといっても、僕は所詮、Fランクだからね」

「そうなんですか？ あの特徴的な体毛の色などから、マッドベアーかとも思ったのですが……さすがにないですよね」

マッドベアーとは、超一流のAランクの冒険者でも六人程度で挑まなければ倒せないと言われる、強大な魔物である。しかし、Fランクのロイが一人で倒してしまったのだから、

きつと似ているだけの別の魔物だったに違いない。

「穢然しんぜんとしないものを感じながらも、自分が聞きかじった知識よりも、戦闘経験のあるロイの言葉の方が正しいのだろうと、セリアは無理やり納得した。

「さて、とりあえず先に進もうか。魔物が出てきたってことは、ここからはもう少し警戒しておいた方がいいかもね。正直、気配を察知するのはそこまで得意じゃないんだけど」警戒するなどと言いながらも、まったく気負きおいなど見せないロイの姿を、セリアは頼たのもしく思った。同時に、興味と疑問も覚える。

「その、魔物と戦った経験があるということですし、実際、慣れているように見えるのですが……ロイさんは冒険者になる前は一体何をしていたのですか？」

少々不躓ぶしづな質問ではあったし、答えは返ってこないかもしれないと思ったものの、つい尋ねてみた。しかし、意外にも少年は素直に口を開く。

「んー……実は、僕って少し前まで魔王討伐隊にいたんだよね」

「え……そうなんですか？」

百年ほど前に発生し、約一年前によく終わりを迎むかえた、魔王と呼ばれる存在との戦争。

その立役者たてやくしやとなったのが、魔王討伐隊だ。

各国の精銳せいゑい達が集められた、まさに人類最強の混成部隊である。

生まれてこの方ルーメン以外の街に行つたことのないセリアでも、さすがにその名前は知っていた。

……だから、正直そこにこの少年がいたというのは意外でしかなかった。

そうは見えない、というのもあるが――

「それならば、何故Fランクなんですか？」

冒険者になる理由は様々。一口に駆け出し冒険者と言っても、経歴や実力も人それぞれだ。そんな理由もあって、最初のランクは以前までの経験をある程度考慮こうりょに入れて決まると聞く。

魔王討伐隊にいたのならば、もっと上のランクから始まってもおかしくない。

「いやー、それが、僕自身どうして魔王討伐隊に入れられたのが分からないくらいだからね。実際、僕はあそこで雑用みたいなことしかしてなかったし」

ロイは少し恥はずかしそうに頭を掻く。

「雑用、ですか？」

「うん。魔物と戦う時は、いつも一人だけだったからね。遊撃ゆうげき、って言ったら聞こえはいけれど、多分僕だけでも対処出来るような、比較的どうでもいいのが、あてがわれてたんだと思う。他の人達はまったく違う場所で戦ってたらしいね」

「それは……雑用というよりも嫌きらがらせでは？」

「さすがにそんなことをするほど余裕があったとは思えないから、あれはあれで意味があったんだと思うよ？　ただ、そうこうしているうちに勇者って人が魔王を倒したらしくてさ」

つい去年のことだし、辺境の街であるルーメンも大騒ぎだったので、セリアもよく覚えている。本当に魔王は倒されて、戦争が終わったのだと実感した。

あれ以来、ルーメンにも一氣に人が増えて、随分賑やかになってきている。
「で、まあ、そんな感じだったから、正直、僕はあの戦争にそれほど貢献出来たって実感が無いんだよね。というか、実際あんま貢献出来てなかったんじゃないかな。なんか気付いたら終わってたって感じだし。それで、冒険者になった時も魔王討伐隊の話はしなかったんだ」

「それで、Fランクから、ということですか……」

納得出来るような出来ないような……そんな話であった。

とはいえ、セリアがどう思おうが、少なくともロイ自身はそう考えているらしい。

「そういうこと。——っと」

会話を続けながら、ロイの右手が動き——二人の進行方向で魔物が倒れ伏した。魔物の首から上は存在していない。

セリアに分かったのはそれだけだった。

「んー、予想通りと言うべきか、魔物が出てくるようになったね」

「そうですね。……まあ、わたしとしては、それよりもやっぱりロイさんは凄くと思いますけど」

「だから、ちょっと慣れるだけだって。他のFランクの人は分からないけど、多分Eランクくらいになれば皆同じようなことが出来るんじゃないかな？」

照れくさそうに首を振るロイを見て、セリアは感嘆の溜息を漏らす。

「そうなんですか……？　やっぱり冒険者さんって凄いですね……」

セリアは冒険者のことを間接的にしか知らない。

色々悪い噂もあるが、今のルーメンの繁栄は間違いなく冒険者のおかげだとも聞く。

様々な依頼を受けてくれ、何より周辺の魔物をしっかりと倒してくれるからこそ、商人達も安心して街に来られるのだと。むしろ悪く言われているにもかかわらず、そこまで頼られているのだから、相応の実力があるということなのだろう。

セリアからすればロイの時点で十分驚きなのだが、これでもまだFランクからEランク程度とは、本当に冒険者とは凄いのだと思つた。

とはいえ、戦う力が求められているのは何も冒険者だけではない。

たとえば、各国の兵士や騎士などは収入も安定している上に人からの評判も良いのに……何故ロイは冒険者になったのだろうか。貢献出来なかったと言つても、魔王討伐隊

に参加していたのならば、そういったところから呼ばれることもあったはずだ。だが、さすがにそれを聞くのは踏み込みすぎというものだ。依頼者と冒険者の関係を完全に超えてしまっている。

冒険者になるのは基本的には、訳有りな人ばかりだという。

一見すると普通の少年にしか見えないロイにも、何かあるのかもしれない。

セリアは歩きながらそんなことを考えていた。

時折魔物と遭遇するが、ロイが瞬殺してしまうため、何の問題もなく、二人は雑談を交しながら先へと進んでいく。

……そうしてしばらく森の中を歩いていると、不意に視界が開け、目の前に広場のような空間が現れた。

「っ……！」

セリアが目を見開いたのは、その場所に驚いたからではない。

広場の中心部に咲いている、一つの花——七色に輝く不思議な色合いのそれに、目を奪われたのだ。

「かなり特徴的な花だけど……もしかして、アレが？」

「……はい、おそらくそうだと思います。わたしも、七色に輝いているから、一目見れば分かるのでしょうか聞いていませんので、正直見分けられるか自信がありませんでしたが……あ

れで間違いないかと思えます」

セリアはこの情報を、母のことを診ている医者から教えてもらった。散々危険だと言われたが、どうしてもと拝み倒し、その特徴と生息場所を聞き出したのだ。

あそこまで特徴的なものならば、さすがに別物とは考えにくかった。

「だよね。ならこれで無事依頼は達成出来そうかな」

「……はい」

セリアは思わず頭を下げて安堵しそうになったが、まだ早いと思ひ直す。

採取出来たわけではないし、帰りもあるのだ。行きの様子を見る限りは心配なさそうとはいへ、油断は禁物である。

はやる気持ちを抑えて、彼女は大きく息を吐き出す。

「それでは、早速探ってしましましょう。もたもたしていたら、魔物に襲われるかもしれないから」

「だね。まあそうなくても、僕がしつかり——」

その直後、アモールの花のところへと行こうと一歩足を踏み出したロイの姿が、唐突に消えた。

一瞬遅れて、セリアの真横で轟音が響く。

何が起こったのか、彼女は理解することが出来なかった。

「……え？　ロイ、さん……？」

呆然と眩き、周囲を見回すが、彼の姿は見当たらない。

ただ……その代わりに、直前までロイの立つていた地面が大きく抉られており——

『ふんっ、道理で騒がしいと思えば……また愚物共が騒いでいたのか。しかと警告していたつもりだったが……どうやら無駄だったようだ』

声が聞こえてきた方向に反射的に視線を向けたものの、声の主の姿が見えず、セリアは眉をひそめる。

視線の先にあるのは森の木々だけで——否、そこで彼女は気が付いた。

見えないのではない。大きすぎるあまり、見えているということに気付いていなかっただけなのだ。

『まあ、いい。理解していようがいまいが、どちらにせよ同じだ』

彼女は視線を森のさらに上へと向ける。

首が痛くなるほどに見上げ……そうして初めて、そこに何がいるのかを理解した。

全長二十メートルはある、巨大な——いや、巨大すぎる、白い体毛を持つ虎のような魔物だ。

『——私の庭を荒らしたモノには、死、あるのみよ』

瞬間、目が合ったことに気付き、思わず唾を呑み込む。

消えたロイがどうなったのかなど、今の彼女に考える余裕はまるでなかった。

セリアは自分はどこで死ぬのだと直感して、自然とその場へあたり込んでいた。

逃げようとしたところで、逃げられるはずもなく、死ぬのが遅いか早いかの違いだけ。

それを理解してしまった以上は、身体力が抜けるのも当然である。

——どうして自分は未だに死んでいないのか。アレからすれば、武器も持たない女一人殺すことなど容易いはずだ。それなのに、何故——

「……どうして、ですか？」

疑問はそのまま口をついて出た。

変わらず恐怖はあるが、一方で、どうせ何にしても結果は同じなのだからと、開き直ってしまったのかもしれない。

「どうして、わたしを殺さないんですか？」

続けた言葉に、返ってきたのは鼻を鳴らすような音であった。

『何故我が貴様を殺さねばならない？　我は無駄な殺生を好まぬ』

「え……？　でも、ロイさんは……」

てつきり彼は殺されたのだとばかり思っていたのだが、そうではなかったのだろうか。しかし、一瞬湧き上がったセリアの希望は、直後に粉々に砕かれた。

『言つたであろう？ 無駄な、とな。私の庭を荒らす不届き者を処分することは、無駄にはならぬ。貴様を放っておいているのは、貴様はそうではないと判断したがゆえよ。それとも……貴様もそんな不届き者だということのか？』

ここで領いてしまったら、セリアもあっさり殺されてしまうのだろう。

それはもちろん、嫌である。死にたくはないし、母も助けたい。

しかし――

「……はい、そうです。ロイさんがここを荒らした不届き者だというのでしたら……依頼人であるわたしも同罪です」

ロイは、誰も受けてくれなかった依頼を受けてくれたのだ。自分の命惜しさに、そんな彼を裏切るような真似は、セリアには出来なかった。

それでも、許されるならば……一つだけ、願いがある。

「……罰から、逃げるつもりはありません。ですが……もし許されるのでしたら、あの花を摘ませていただけませんか？ そしてどうか、近くの街に届けることをお許しください」

死にたくはないけれど、助かる道が存在しないのであれば、せめて母だけでも救いたかった。

それならば、ここまで連れてきてくれたロイに、多少なりとも報いることになるだろう

から。

返答は、すぐにはなかった。

ジツとその姿を見つめながら……セリアはやはり無理だろうかと思う。

彼女はこの魔物について、心当たりがあった。

『私の庭』という言葉や、セリアでも理解出来るほどの重圧、何よりも人語を操る高度な知能を持つことから考えて、おそらくこの森の主と呼ばれる魔物だ。

この周辺に魔王の手が伸びなかったのも、そんな恐るべき魔物がいたせいだと言われている。

『――ふむ。よかろう』

「えっ……ほ、本当ですか!？」

一瞬、願望による聞き間違いだと疑い、セリアは思わず聞き返した。

しかし、そんな態度は不敬だと言わんばかりに、魔物は不快そうに鼻を鳴らす。

『ふんっ……何に使うのかは知らぬが、どうせ我には必要のないものよ。そんなものを出し惜しむほど、私の器は小さくない』

「あ、ありがとうございます……!」

『――だが、無論対価はもろう。必要がないとはいえ、私のものであることに変わりはない。ならば、貴様が見返りをよこすのは当然であろう?』

それは道理であった。勝手に自分のものだと言っているだけでしかないが、力は正義だ。力を持たないセリアは、どれだけ勝手に決められたルールであろうと、従わざるを得ないのである。

とはいえ——

「……ごもつともだとは思いますが、生憎わたしには対価として差し出せるものがありません」

『いいや？ そんなことはないとも。——貴様には、貴様の全てがあるろう？ その肉、その血、その魂……そして、苦痛と絶望。全てをよこせ。貴様は死に至るその瞬間まで、我に食われ続け、我を楽しませるがいい。そうして見事果たすことが出来たのであれば、貴様の望みを叶えてやるう』

「っ……本当、ですか？」

『案ずるな。約束は守る』

その言葉が嘘でない保証はなかったし、そもそも今言われたようなことを自分が出るとも思えない。

けれど……他に方法はなかった。

「……分かりました。では、それでお願ひします」

『くくっ、では契約成立だな』

これから自分を襲う苦痛を想像し、身体が震えてくる。恐怖で逃げたくなる。でも、彼女は自分で決めたのだ。

母だけは絶対に助ける、と。

「それでは……まずは、あの花を失礼しても——」

身体の震えを必死に抑えながら、セリアは立ち上がり、一步踏み出す。

その、瞬間。不意に彼女の身体を、影が覆った。

一体何事かと、反射的に顔を向け——固まった。

「——え？」

そこにあつたのは、巨大な前足であった。あの魔物のそれが、頭上から今にも振り下ろされようとしていたのだ。

だが、そんなことをする必要性が見出せない。何よりもこの状況はまるで——

『ああ、約束は守るとも。約束は、な』

嘲笑うかのような響きと共に言葉が告げられた。

そこでようやくやく、セリアは何を言われているのかを理解した。

彼女が食われ、楽しませることが、あの花を手にするための対価である。ならば……その前に彼女が死んだら——殺されたら、あの花を渡す理由もなくなるのだ。

そんな、ふざけた——

「——くかか。本当に貴様らは愚物よな。我は西方の支配者ぞ？ その我が貴様らにくれてやるものなど、何一つとして存在するわけがあるまい」

セリアには魔物の表情など見分けられないけれど、それでも今この魔物がどんな表情を浮かべているのか理解することが出来た。

それは、嘲笑だ。そして、愚かであつぽけな存在を叩き潰す、愉悦の表情である。

直後、巨大な前足が振り下ろされた。

セリアは何もすることが出来ない。

ただ……最期に、ごめんなさいと。

誰に対してのものか分からない言葉が浮かんだ。



「……納得いかないっす」

冒険者ギルド、ルーメン支部。

セリアとロイが去り、いつも通りの騒ぎの戻ったそこに、不意にポツリと声が響いた。

声の主は、栗色の髪に同色の瞳を持つ一人の女性だ。

外見は若く、二十歳前後といったところだが、纏っている雰囲気は素人離れしている。

だが、それも当然である。彼女の冒険者ランクは、A。

超一流の冒険者であるこの女性——フルールは、隣にいる強面の男を睨みつけながら、もう一度同じ言葉を口にした。

「納得いかないっす！」

フルールが所属するパーティーのリーダーでもあるその男——グレンは、面倒くさそうに溜息を吐き出した。

「納得いかねえって……何がだよ？」

「そんなの、決まってるじゃないっすか！ さっきの子達のことっすよ！ あんなの見殺しも同然……いえ、それより酷いじゃないっすか！」

「まあ確かにー、一理あるわよねえー」

緊張感のない声で同意を示したのは、二人のパーティーメンバーでもあるアニエスだ。

妖艶な身体つきをした女性で、Aランクの冒険者にして、魔導士ギルドからもAランクを与えられている実力者である。

「Fランクの冒険者にアマールの花を採りに行かせるなんてー、死ねって言ってるのと同義だものねえー」

「そうっすよ！ アレって、あちし達でも採れるか分かんないってやつじゃないっすか!? だからこそ、金貨千枚なんていう馬鹿げた金額の依頼が出てくるのに、誰一人として受け

てないんすから！」

Aランクの冒険者にとつても、金貨千枚は破格だ。たとえ危険な依頼でも挑む価値は十分にある。

にもかかわらず放置されているのは、それが金貨千枚ですら割に合わない、危険すぎる依頼だということの意味するのだ。

「……アモールの花がある場所は、魔の大森林の主の棲息域だつて噂があるくらいだからな。実際、今まで生きて帰ったやつは一人もいねえ……アレは、そういう依頼だ」

「つ……分かつてるのに、どうしてつすか!? リーダーはあの時止めるべきだったんじゃないんすか!? 確かに、基本的に冒険者は何をするにも自己責任つすけど……どうして後押しするような……!?!」

激昂するフルールに、グレンはなおも面倒くさそうに溜息を吐き、まるで駄々をこねる子供を見るような目でフルールを見る。

「じゃあ、テメエは一体どうしたいってんだ? 仮に今から追いかけたところで、どう考えたって手遅れだぜ?」

「つ……それは……そうつすけど……」

フルールは何とも言えない顔で俯く。

結局のところ、彼女が腹を立てているのは自分自身なのだ。

おかしいと感じていても、グレンにも何か考えがあるのだろうと思つて、何もしなかつた自分に。

それでもやつぱり納得がいかなかったから、今更騒ぎ立てる。

……そんな中途半端な自分がまた腹立たしい。

唇を噛むフルールを横目で見ながら、アニエスが意味深に微笑む。

「ふふつ……グレン、意地悪してないで、そろそろ教えてあげたらどう?」

「……えっ? どういうことつすか?」

思わぬ言葉にフルールは顔を上げた。

視線を向けられたグレンは、顔をそらしながら舌打ちを漏らす。

「別に意地悪してたわけじゃねえよ。どうせ言ったところで分かんねえだろうなつて思つただけでな。フルールがアイツと会うのは、今日が初めてだしよ」

「……どういうことつすか?」

同じ言葉を繰り返すフルールに、グレンも再度舌打ちして応える。

「……マッドベアー、シャドウウィーター、レッドワイバーン、グリーンスライム、サイクロプス。何のことか分かるか?」

「……? 魔の大森林に棲息してる魔物。あちし達でも一対一じゃ勝ち目がないようなやつらじゃないつすか」

「そうだけど、そうじゃねえ」

「ふふ……あの子がここに来た初日、討伐してきた魔物よー」

「……は？」

一瞬、何を言っているのか分からないといった顔をするフルールだが、グレンとアニエスの表情は真剣そのもので、ふざけて冗談を言っている様子ではない。

……その意味するところを理解したフルールは、ごくりと唾を呑み込んだ。

先ほど挙げられた魔物は、彼女達Aランク冒険者がパーティーを組んで、入念に準備をした上でならば何とか倒せるレベルの相手である。

それとて、あくまで一体だけを標的とした場合であって、全てを一日で討伐するなど到底不可能だ。

しかし先ほどのアニエスの言葉が事実ならば――

「……Fランク、なんすよね？ 何でっすか？」

フルールは当然の疑問を口にした。

「オレが知るわけねえだろ。……まあ、予想は付くがな」

「……何者、なんすか？」

呆然と呟くフルールの前で、二人は肩をすくめてみせる。

「それを知りたいのは私達の方で、きっとギルドも同じでしょうねえー」

それからグレンは、遠くを眺めるように目を細めながら、ポツリと呟いた。

「……ま、正直アイツなら、魔の大森林の主を狩ったところで驚きやしねえがな」



「――なんていうかまあ、見事なまでに魔物らしいやり方って感じだよな。まあ、むしろクソ野郎っぽいって言うべきかもしれないけど」

その声が聞こえたのと、轟音が響いたのはほぼ同時であった。

セリアは恐怖で瞑っていた目を反射的に開く。

瞬間、彼女の目に映ったのは、振り下ろされたはずの魔物の前足の大部分が、ごっそりと消失している姿だ。

僅かに遅れて傷口から鮮血が噴き出し、混乱と怒りが混ざったような声が響いた。

『っ、なっ……なっ!? ば、馬鹿なっ……!? 我の身体が……!? い、一体何が……!?』

「んー、そんなに驚くことかな？ 当ててくださいって言わんばかりの大きさなんだから、そりゃ、普通に攻撃されるだろうに」

「……っ」

先ほどから聞こえてくる声が誰のものであるのかは、確かめるまでもなく分かった。

それでも信じられず……彼女は振り向いた先に見えた少年の名をたどどしく呟く。

「ロイ、さん……!?」

「や、さつきぶり……なんてね。いや、怖い思いさせちゃって本当にごめん。やつぱり駄目だね、警戒は苦手……ってのはまあ、言い訳にもならないんだけど」

気楽に謝罪を口にするその姿は、やはりさつきまでと同じロイにしか見えなかった。しかし、まさか隙を突くために隠れていたわけではあるまいし、その言葉からも察するに、おそらくあの魔物の攻撃を受けたはずだ。

なのに、彼の身体には傷一つ見当たらない。

それに、魔物の前足を消し飛ばしたのも、この少年の仕業なのだろう。

確かに、彼はここまでの道中で遭遇した魔物を難なく倒してきたが、あの魔物はそういうもの達とは比べ物にならない。それがセリアにも分かるほど、圧倒的だ。

噂に聞く魔王にすら匹敵するかもしれない、そんな魔物である。

「ま、このままじゃ格好が付かないし、何よりも依頼と受けた冒険者として失格になっちゃうからね。名譽挽回させてもらうとしようか」

「……ほざけ、愚物が……! 何をしたのかわからぬが、油断した我を傷つけた程度で、凶に乗るなよ……!? 西方の支配者たる我の前では、貴様なぞ——」

「——うん。話が長い」

魔物の激昂など意に介さず、ロイは右手に握った剣をその場で振った。

しかし、いくら剣の長さがあっても、当然、あの巨体に届く距離ではない。

そのはずなのだが……

直後、魔物の左肩が、ずれた。

そのまま冗談のように滑り落ち、鮮血が噴き出す。

『づつ、なっ、ばっ……!? 貴様……!? 一体、何を……!?』

「何って言われても……自分で言ったそばから油断してたから、普通に斬っただけだぞ?」

さも当たり前のような顔でロイは言うが、無論普通ならありえない。

セリアも常識には疎い方だという自覚があったものの、冒険者だとか一般人だとか、そういうのとは関係なく、さすがにこれがどれだけ常識外れかは分かる。

「さ、とりあえず、とっとと終わらせようか。今回の依頼はアモールの花の採取が目的であって、わけの分からない魔物を倒すことじゃないからね」

「……貴様、わけの分からぬ、だど……!? この我を前にして……よくも吼えたな、愚物……!?」

「だから、そういうの、いいんだって。……そういえば、魔王討伐隊にいた頃も似たようなのに会ったっけなあ。あれもなんか妙に偉そうだったけど……喋る魔物ってのは、偉